

# 遊びと子どもの発達 ①

〈顔・手・指の遊び〉

加古里子

生れた子どもに、遊びという生活行動が出てくるものになるものは、脳幹によって司られる原始反射である。<sup>1)</sup> モロー・逃避・

瞬目・口唇・追視・抱握・自動歩行などと区分けされたこれ等の外部刺激に対応する反射的行動は次の意識的習慣的な成長するに不可欠な愛撫・授乳・摂食、認知、把握、歩走等の諸行動を形成してゆく。従っていわゆるスキミングとか母乳授乳は新生児にとって重要であるばかりか、成長のふみ石といっても過言ではない。この重要不可欠な事は、親や大人が新生児に対して抱くいとしい、可愛い、守護してやろうというごく普通の愛情によって巧みに成就されるようになっていく。

子どもの遊びの第一歩は、こうした親や大人の対応により、フアンツの研究<sup>2)</sup>に見る如く最も人間的な感情表出のこまやかではっ

きりしている顔への注視や、指や腕、全身に対する愛撫庇護行動によって、次への発展をきずいてゆく。

たとえば新生児は体軀に対し頭部の占める比率が大であり、目の位置は下である。従って頭部なかなずくおでこが大きく、そして狭い産道通過時の配慮の為か鼻が小さくひくいく状態にある。親や近親者はこの新生児が、普通の出来うれば親以上のみめよき顔かたち成人した時にはなつてほしいという願いを抱く。それでその赤児のおでこをさすり、鼻をかるくひっばつてとなえことのような歌をうたう。<sup>3)</sup>

へでびでび ひっこめ (ひたい)  
はなはなのびろ (はな)

或いは「もみじのような」とたとえられる両手をひらいたり、



それじゃ ちよこちよ (わきの下)

へおてらのかげから (手)

かいだんのぼって (腕)

ちよこちよちよ (わきの下)

へ二階へあがらしてや (肩)

屋上へあがらしてや (頭)

やねにおろさしてや (肩)

かいだん下って (胸)

コッチャコチャ (わきの下)

もうここまでになると、もうそれまでの赤ちゃん遊び、あやぎれ遊びではなく、自分や相手の体の一部を使ったり示しながら、物語りのような発展や首尾一連の道ゆきをたどる間、言葉や形状や動作やらによる「まとまり」の面白さを認識するようになる。その面白さを満喫したために、言いにくい事を自分に適するようになおしたり、理解が不十分な点をびったりするようにする。或いは順序をかえたり、それにふさわしいものを添えたりして、各種の「身辺身近」な遊びがつくられてゆく。

最も身辺にあつて身近なものといえば、手や指である。誰にもあつてどこへでも一緒にいっていつてくられて、厄介にもならずいたって簡便である。忘れる事もないし、しまい込む手間もいらな

い手や指こそ、遊ぶ折の用具や道具として、こんなにもいいものはない。こうして「顔あそび」によって誘発された子ども達は、「手や指の遊び」を楽しむ事となるのである。<sup>4)</sup>

へこどもとこどもがけんかして (小指)

くすりやさんがとめたけど (薬指)

なかなかけんかはとまらない (中指)

ひとたちやわらう (人差指)

おやたちやおこる (親指)

という指合せごっこや、両手の指をくんでフクロウやサザエやカエルの形をつくる指組み遊び、この中には手によるおふる遊びというものがある。左右の指をからめて脱衣場・ひき戸・流し・浴槽・流し口などを作るのに難易により四種の作り方があるが、そこへ、一本指の客が来り、三本指の湯舟につかり、その時の指のしめ具合によって「あついかぬるいか」の問答となり、ぬるければわかし、あつければうめるといふ所作がそれに続くという演目がくりひろげられることとなる。子ども達にとってそのやりとりと、指の接触感触が大きな楽しみの源泉となる。

また指や腕による各種のバツ遊びがある。

へ東京都 (手の甲)

ガリガリ区 (手のひら)

ハリサン町

(指でつつく)

ツネ子さんが

(つねる)

パチン

(叩く)

といつて相手の片手をだんだんといじめてゆくだとか、イタチ・ネズミ・ハチごつこと称して、手の甲を次々とつまんでだんだんと高くつみ上げてゆく遊びがある。

或いは指頭・指間の個所によって、名前、天候・運勢などをうらなう遊びが数多く知られている。それらは

へ天国・地獄・また地獄

(吉・凶・凶)

へ貧乏・大尽・おお大尽

(凶・吉・吉)

へ晴・晴・くもり

(吉・吉・中)

雨・雨・くもり

(凶・凶・中)

へ地獄・極楽・また地獄

(凶・吉・凶)

極楽・地獄・また地獄

(吉・凶・凶)

へよい事・わる事・大わる事(吉・凶・凶)

わる事・よい事・大よい事(凶・吉・吉)

というように、それぞれの吉・凶の頻度と交替リズムが、皆それぞれがっている点、大いに注目し値する所である。もっともこの種のものの中に、

へエチ・ケチ・パー

というものがあって、それらはいずれも色欲・金欲・名誉欲をあらわしているというように、救いがないというか現実社会の鏡というか、おそるべきうがったものもあらわれて来ている。

こうした指や手の遊びは、それを遊ぶことによってさまざまに指をつかいこなし、まげからめ、折ってゆく間、巧みに意図通りに駆使する器用さを見つけてゆくと共に、その意図通りに指をうごかす時、形態やことばや、願いをこめることによって大脳を動員させるという智的な行為を、たのしみをもって遂行していた事を知るのである。それは子ども自身の成長に、大きな影響を与えていた筈であろう。もちろん誰も数量的に把握した者は幸か不幸かいないようである。(つづく)

引用文献

- 1) 黒丸正四郎・三宅廉「新生児」日本放送出版協会(昭46)
- 2) FANZ, R.L., 'The origin of form perception, Scient. Amer., 204 (1961)
- 3) かこ・さとし「子どもと遊び」大月書店(1975)
- 4) 加古里子「子どもの遊びを考える」教育評論三二五(1975)